

荒木昭次郎教授への献辞

総合管理学部長 松 岡 泰

荒木昭次郎先生は1940年に旧矢部町、現在の山都町にお生まれになり、高校時代までを過ごされました。先生は最初は海上保安庁に2年間勤務され、海洋観測、沿岸測量、海図作成などの仕事に従事されました。また日本都市センター時代には旧厚生省の委託を受け、ゴミの実態調査をされ、廃棄物処理法の原案作成に関与されました。

早稲田大学在学中は政治学の内田満教授に、大学院では荻田保氏に師事されています。とくに旧自治省ご出身の荻田先生は、「横文字理論はいいけれど、それよりもやったことが世の中にどう役に立つかを考えなさい」というのが持論で、荒木先生はこの荻田先生の教えに感銘を受けたそうです。爾来、荒木先生は地方自治研究を単にアカデミックな研究（机上の学問）に終わらせるのではなく、実践の学として位置づけられ、「理論と実践」の統一に心がけられました。

この体験を原点にして生み出されたのが、先生独自の「参加と協働」という概念です。荒木先生は地方自治研究で「参加と協働」を唱え、地方自治研究のパラダイム転換を唱道された方であり、日本における地方自治研究の先駆者ないしはパイオニアです。先生が地方自治の先進国であったアメリカのヴァージニア大学に留学された折、現地のシャーロットヴィルで実態調査をされ、このアメリカでのフィールドワークの経験が衝撃的であったこと、それから著名なオストロム教授夫妻と出合わせ、co-production という概念に遭遇されたこと、この2つの経験が、荒木先生が「協働」という概念を造語される重要な契機であったと伺っています。いずれにしろ、先生が提起されました「参加と協働」という概念は、学問の分野で地方自治研究の分析枠組みそのものを大きく変えただけでなく、この理論は現実の世界でも行政の機能なり役割を転換させる牽引車となりました。そしてこの用語は今ではすっかり一般に流布し、行政や地

方自治の分野では日常的に使用される用語になっています。この枠組みを理論的に集大成されたのが、『参加と協働：新しい市民＝行政関係の創造』です。

しかし先生がそこに到達されるまでの道のりは、遠く険しかったようです。戦後始まった驚異的な日本の高度経済成長は1990年代初頭まで持続しましたが、この高度経済成長と飛躍的な発展は当時の通産省をはじめとする中央集権的で効率的な行政主導で達成されたと一般に考えられていました。その結果、日本の政治の仕組みを根本的に変えようとする発想自体がなかなか受け入れられませんでした。荒木先生が打ち出された「参加と協働」という考え方は、明治以降すっかり定着している集権的な政治の仕組みそのものを根本から変えようとする、まさに革命的な発想であったため、その分だけ、先生の理論が学会及び行政の世界で受け入れられるには時間を必要としたようです。先生が提唱された「参加と協働」どころか、そもそも地方自治の研究が学問の分野で正当に評価され始め、政治学の世界で市民権を獲得するのは、おそらく1980年代半ば以降でしょう。また学問的な世界を離れて、自治体の行政が「協働」を正面から取りあげるようになるのは、財政難から全国の地方自治体が行財政改革を断行せざるをえなくなる21世紀に入ってからと思われれます。

それだけではありません。他の世界と同様に、荒木教授もパイオニアとして学問の分野では長い下積み時代を過ごされ、ご苦労されています。先生が学部時代や院生時代を過ごされた1960年代は、地方自治の重要性は言葉としては叫ばれていましたが、学問分野としてはほとんど認知されていませんでした。したがって1970年代や80年代になっても、大学にはその種の講座は全国にもまだ数えるほどしかありませんでした。ですから荒木先生を含め、この分野の研究者は、研究の入り口の就職の段階でたいへんご苦労なさっています。

以上、おもに学会のパイオニアとしての先生のご苦労を紹介しましたが、先生は故郷の熊本に帰られてからも多方面で活躍されました。2000年3月には、荒木先生は1973年から教壇に立たれていた東海大学を離れ、翌月の4月に熊本県立大学の総合管理学部に移られました。先生は学外の審議会、講演会、研修会などで八面六臂の活躍をなさいましたが、もっとも重視されたのは、やはり

学生の教育でした。

先生は温厚なお人柄の方ですが、いざ学生の教育となると指導は厳しく、ハードルを常に高く設定されていました。また本学の大学院では10年間院生をご指導されましたが、とりわけ院生の指導には情熱を注がれ、博士号取得者を3人も育てられました。前任校の東海大学も含めると、合計で5人の博士号取得者を育てられたということです。大学院で博士号取得者を育てようとすると、莫大な労力と時間を教育に費やすことになり、それ相応の覚悟が必要です。博士1人を育てるだけでも本を1冊執筆するくらいのエネルギーを必要としますので、したがってこれは大変な偉業です。私なりに推測すれば、後輩の研究者を育てなければという学問的責任感と、荒木先生の院生には行政職員が多かったため職員の意識を変えなければという実践的意識が相俟って、先生の背中を後押ししていたように思えてなりません。ともあれ、本学での10年間、先生はひたすら学部学生と院生の教育に専念され、研究者としてだけでなく、教育者としても一級の方でした。

熊本県立大学において、学生に素晴らしい教育をしてくださったこと、アドミニストレーションの理論を発展してくださったこと、そして私達同僚を導いてくださったことに、教員一同、心より感謝申し上げます。